

35-53.

落合美佐子. 2010. 「外国人研修生・技能実習生の生活実態と意識——語りの中から見えてくるもの」『群馬大学国際教育・研究センター論集』第9号：51-68.

斉藤善久. 2023. 「外国人労働者政策の針路 転職・転籍の制限、一切やめよ」『日本経済新聞』2023年11月22日. <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCD137DA0T11C23A1000000/> (2026年4月10日閲覧).

牲川波都季. 2025. 「実態調査の成果を社会統合政策へ活かすために」『社会言語学』XXV号：213-230.

山田 泉. 2003. 「第1章 日本語教育の文脈を考える」『人間主義の日本語教育』岡崎洋三；西口光一；山田泉（編著），9-43 ページ所収. 東京：凡人社.

林 英一. 『残留兵士の群像——彼らの生きた戦後と祖国のまなざし』新曜社, 2023, 344p.  
林 英一. 『南方抑留——日本軍兵士、もう一つの悲劇』新潮選書. 新潮社, 2025, 236p.

本稿が取り上げる二冊は、第二次世界大戦後の東南アジアおよびその周辺地域における日本人の海外経験を扱った著作である。『残留兵士の群像——彼らの生きた戦後と祖国のまなざし』（以下、『残留兵士』）は戦後アジアに残留した日本軍人・軍属（台湾人日本兵を含む）に焦点を当て、『南方抑留——日本軍兵士、もう一つの悲劇』（以下、『南方抑留』）は連合軍によって抑留された日本軍人・軍属の経験を対象とする。

敗戦によって大日本帝国の枠組みが崩壊したとき、引き直された国境線の「外」には軍人・軍属と民間人を合わせて約660万人の日本人がいた。これらの多くは復員や引揚げというかたちで国境線の「内」へと戻っていくが、その過程で一時的に「外」に抑留された人たちがいた。また、さまざまな事情から「外」に残留した人たちもいた。

残留に関しては、横井庄一や小野田寛郎といった人物の物語が繰り返し語られ、日本社会における残留兵士像を形成してきた。しかし著者によれば、実際には1万人規模の残留兵士が存在したにもかかわらず、その像はせいぜい十数件程度の事例をもとに構築されたにすぎなかった。これに対して著者は100件に及ぶ残留の事例を掘り起こし、その多様な実態に迫る作業を重ねてきた〔林2012〕。

本稿で紹介する二冊はそうした研究の蓄積の上に成り立っている。『残留兵士』は、残留兵士が日本社会において特定の像として受け入れられてきた背景に迫る。そして対象を残留から抑留へと拡大したものが『南方抑留』である。

抑留に関しては、敗戦から帰還までの待機期間を含めるか、収容所に収容されて労働を強いられた場合に限定するかなど、抑留の捉え方や時期によって規模が異なる。ただし、後者の限定的な考えに立ったとしても、南方では1946年末に日本軍主力の送還が完了した後もなお約10万人がイギリス軍の管理下で復旧作業などに従事しており、抑留は残留と比べてはるかに規模が大きかった。

しかし南方における日本人の戦後経験への関心は主に戦犯問題や残留兵士に向けられ、抑留の経験は断片的にしか語られてこなかった。さらに言えば、これらの経験は東南アジア側の戦争の記憶とも十分に接続されておらず、日本と東南アジアのあいだで記憶のすれ違いが続いたまま今日に至っている。

こうした記憶の偏りや断絶に対して、『残留兵士』と『南方抑留』はそれぞれ異なる角度から応答を試みている。ただし両書は、制度や政策といった外在的な枠組みからではなく、個人の語りやそれをめぐる表象に寄り添いながら戦後経験を内部から捉え直そうとする点で共通している。こうした試みは、戦後経験を形づくる戦争経験が東南アジアでいかに語られ、それが日本との関係の中でどのように位置づけられてきたのかという問題とも深く関わっている。以下ではこの点に留意しつつ、両書が戦後経験をいかなる像として描こうとしているのかという観点から検討したい。

\*

『残留兵士』は、残留兵士を戦後史の周縁に置か

れた奇譚と捉えるのではなく、日本社会の戦争の記憶のあり方を映し出す鏡として捉え直す意欲的な試みである。本書の核心は、残留兵士の実像とそれをめぐる映像表象とのあいだに生じるずれを分析することで、日本社会が何を記憶し、何を語り、何を語らずにきたのかを浮かび上がらせることにある。

序章「日本軍兵士の残留」では、復員、引揚げ、抑留、送還といった帝国崩壊後の人口移動の一形態として残留を位置づけ、残留兵士が日本社会の戦争記憶の周縁に置かれてきたことを確認する。日本社会は残留兵士に強い関心を抱いてきたとはいえ、従来の関心は横井庄一や小野田寛郎といった「発見された兵士」に著しく偏っていた。これに対して本書は、ドキュメンタリーや映画などの映像資料を主要な分析対象とし、文献史料や聞き取り調査と照らし合わせながら、残留兵士の実像とその表象との間で繰り広げられるせめぎあいを掘り下げる。

第一章「残留兵士の組織化と英雄化——インドネシア」は、残留兵士をめぐる表象の変遷を追う。1950年代、インドネシアの残留兵士は日本社会で「軍神」などとして英雄化されたが、その評価はインドネシア側のものとは乖離していた。1960～80年代に入ると残留兵士の表象は「棄民」に変化し、「救済すべき存在」として再発見された。1990年代以降には残留兵士の多様な生き様が描かれるようになるが、同時に日本軍の役割や残留兵士の貢献を強調する英雄化の動きも見られた。残留兵士の生死が戦闘ではなく病気や飢餓に左右されていたことが示され、従来の英雄像に修正が加えられる。

第二章「土着化した残留兵士——マレーシア、シンガポール、タイ」は、残留兵士を現地社会に根づいた生活者として描く視線に焦点を当てる。1970年代の「未帰還兵を追って」シリーズで、残留兵士は戦後日本の豊かさや忘却を告発する「棄民」として捉えられた。著者は、同シリーズの「土着化」という視線が「日本／土着」や「文明／未開」の二項対立に基づく先入観に支えられていたと批判する。これに対して2000年代のドキュメンタリー『花と兵隊』は、残留兵士の妻たちの語りを

通じて、家族形成を軸として現地に根を下ろした生活者として残留兵士を位置づけ直す。

第三章「特異な残留兵士——グアム島、ルバング島、山西省」は、長期潜伏型の残留兵士を取り上げる。横井庄一や小野田寛郎のような長期潜伏型の残留兵士は1970年代の日本社会で国民的熱狂の対象となり、「最後の日本兵」として神話化されたが、現地社会では加害者として記憶されていた。2000年代以降、歴史認識論争やメディアの再表象を通じて、日本社会でも残留兵士の加害性や政治的背景が再検討されるようになった。終戦後に動員された中国山西省の残留兵士の事例とあわせて、本章は国家に動員されて戦後に見捨てられた存在という視点から残留兵士を捉える。

第四章「残留兵士と家族——ラオス、ベトナム」は、残留兵士の経験を個人史ではなく家族史として捉え直す。残留兵士が現地社会で家族を築いた事例を通じて、残留兵士の日本帰還の可能性が家族全体の生活に関わる問題になることを示し、残留の社会的側面を明らかにする。1990年代のドキュメンタリーでは、日本に帰国した元残留兵士とベトナムに残された妻子の家族離散が描かれ、国家の介入が家族の運命を決定づけていた。2000年代以降には妻子の語りが前面に出され、残留兵士の経験は当人の日本帰還後も家族や次世代の中で記憶され再解釈され続けている。

第五章「忘却された残留兵士——台湾人」は台湾人残留兵士を扱い、残留兵士の問題を植民地責任の視点へと開く。1970年代のテレビ番組で取り上げられた中村輝夫は、日本でも台湾でも居場所を失い、「悲劇の帰還兵」として消費されつつ忘却されていた。また、インドネシアに残留した宮原永治は来訪者の期待に応じて英雄像を演じたものの、著者はその背後に語り得ない深い傷を読み取る。台湾人残留兵士は、戦争中は皇国臣民として日本軍に動員されながら戦後は日本国籍を失って宙吊りの存在となり、二重の周縁性を背負って忘却されてきた。

終章「映像における残留兵士の実像と表象」は、映像における残留兵士の実像と表象の関係を総括する。残留兵士の実像は、負い目や貧困を抱えつつ現地社会に定着し、晩年に望郷の念や違和感を

抱く人たちだった。しかし映像では時代ごとに「異邦人」「哀れな日本人」「英雄」「被害者／加害者」などと再構成されてきた。本章は、時間の経過とともに実像が後景化していった表象が強調される中で、残留兵士は映像の中で生き続ける存在になっていると結んでいる。

本書の意義は、残留兵士をめぐる議論を従来の奇譚や英雄譚から解放し、歴史的・社会的な文脈に位置づけ直した点にある。横井庄一や小野田寛郎といった「最後の日本兵」の物語はむしろ例外的な事例であり、実際には多くの残留兵士が逃亡兵としての負い目や生活の困難を抱えながら現地社会で生活を築き、長い年月を過ごしていた。本書はそうした日常的で長期的な経験に焦点を当てることで、戦争を一過性の出来事ではなく、その後も長く続く生活の問題として捉え直している。

また、本書はドキュメンタリーや映画といった映像資料を主たる分析対象としつつ、文献史料や聞き取り調査と照合することで、残留兵士の像が時代ごとにどのように再構成されてきたのかを描き出している。そこに表れるのは、「軍神」としての英雄、「棄民」としての被害者、あるいは現地に根を下ろした生活者としての姿など、多様な像の重なりである。それらの像は並存するのではなく、その時々、社会的欲望や倫理観の中で選び取られ、強調され、あるいは忘却されてきた。

本書でとりわけ印象的なのは、残留兵士の経験が一貫して加害と被害の両義性の中に置かれている点である。彼らは敗戦後の混乱の中で困難な生活を余儀なくされた存在であると同時に、かつて東南アジアにおいて支配者として振る舞った主体でもあった。本書は、彼らを一方的に英雄化することも単なる被害者として描くことも避け、その複雑な位置を描き出している。この点で本書は戦争経験をめぐる倫理的問題にも深く切り込んでいる。

さらに、本書は残留兵士の像が日本社会の内部でどのように生成されてきたのかを明らかにする。これは裏を返せば、それらの像が現地社会の記憶や評価と必ずしも交わってこなかったことを意味する。残留兵士は、日本社会で語られてきた存在であると同時に、東南アジアでは別のかたちで記

憶されてきた存在だった。本書はそのずれを可視化することで、戦争記憶の地理的な非対称性を浮かび上がらせる。

このように、『残留兵士』は既存の残留兵士像を解体し、その背後に広がる多様な経験へと読者を導く。そこには語られる歴史と語られない歴史の境界を問い直そうとする著者の強い志向を見て取ることができる。

\*

これに対して『南方抑留』は、これまで明確な像を与えられてこなかった経験に新たに輪郭を与えようとする試みである。本書は、日記や手記といった自己語り史料に依拠して、抑留という極限状況の中で人々がいかに関心し、揺らぎ、自己を再定義していくのかを追究する。

本論は6つの章で構成されている。

第一章「タンジュン・プリオク港——インドネシア・ジャワ島」では、インドネシア独立革命という動乱の中で、ジャワ島タンジュン・プリオク港の日本兵がどのように再動員され、過酷な労働と屈辱を経験したかが描かれる。また、抑留者がそれを過去の反省や再出発の契機として意味づける過程も示され、抑留者でありながらも加害者としての記憶も持つ南方抑留の複雑な両義性が提示される。

第二章「レンバン島——シンガポール沖・リアウ諸島」では、リアウ諸島のレンバン島での抑留が扱われる。飢餓と孤立の中で軍隊秩序が崩壊して内部対立が生じる一方で、軍人精神を維持しようとする動きも存在した。軍属と陸軍伍長という異なる立場の抑留者の対比を通じて、同じ抑留状況でも軍人と軍属とで体験の意味づけが異なっていたことが浮き彫りにされる。

第三章「コカイン収容所——ビルマ・ラングーン」では、ビルマのコカイン収容所を中心に、過酷な労働と帝国秩序の逆転による屈辱や「奴隷化」の感覚が描かれる。また、収容所では日本軍内部の階級秩序が維持される中で文化活動や交換経済が形成されたことや、知識人の抑留者にとって「書くこと」が精神的抵抗と自己保持の手段になっていたことなどが示され、南方抑留の経験が多層的に描き出される。

第四章「カンルバン収容所——フィリピン・ルソン島」では、フィリピンのカンルバン収容所での抑留経験を取り上げる。日本軍組織の解体によって炊事担当者や暴力集団といった新たな権力構造が生まれ、極限状況の中で人間関係と倫理がどのように変容したのかが詳述される。収容所内の壁新聞や演芸などの文化活動が抑留者の精神的支えとなったことも紹介される。

第五章「ラバウル戦犯収容所——南太平洋・ニューブリテン島」では、日本軍組織が比較的維持されたまま抑留が行われたラバウルでの抑留を分析する。自給自足体制と短期復員が行われる一方、収容所内には階級的な不平等や権力格差が存在し、職業軍人と召集兵の間で価値観の対立が生じた。また、戦犯問題や対連合軍関係を通じて、抑留が帝國的権力関係の延長として経験されていたことが示される。

終章「歴史対話」では、抑留をめぐる歴史認識の対立とそこから生まれる対話の可能性が検討される。元日本人抑留者とイギリス人研究者の論争が被害と加害をめぐる認識の非共有性を示す一方、別の元日本人抑留者と元イギリス軍日本語将校の交流は、歴史認識の一致ではなく相手の経験への共感を通じて対話が成立しうることを示している。ここでは南方抑留の記憶が国民国家の枠を超えて市民レベルで再構成される可能性が提示される。

本書の大きな特徴は、日記や手記といった自己語り史料に記された言葉の揺れや葛藤を読み解く姿勢にある。史料に現われる多様な主体の声は、それぞれ異なる文体と視点を持ちながら、敗戦後の混乱と抑留という状況の中で交錯する。その複数の声を重ね合わせることで、著者は単一の抑留者像では捉えきれない多層的で矛盾をはらんだ抑留経験の全体像を浮かび上がらせる。

また、ここでも加害と被害の両義性が重要な軸となる。抑留者は連合軍によって拘束された存在であるが、その一方で、彼ら自身がかつて日本軍が現地社会に対して行ってきた行為の記憶を背負っている。本書はこの二重性を出発点として、抑留という経験がどのように内面的な反省や再出発の契機として意味づけられていくのかを描き出す。

終章で提示される対話の可能性も印象的である。歴史認識の一致が難しいことを認めつつも、なお対話の可能性を手放さず、その鍵として共感が提示される。互いの立場や経験を想像しようとする営みは、完全な理解には至らなくても、歴史の断絶を乗り越える回路を開く可能性を持つ。ここには過去の経験を現在の他者理解へとつなげようとする著者の倫理的な志向が明確に示されている。

\*

両書を併せて読むと浮かび上がるのは、多様で断片的な経験の集積をいかにして一つの像として捉えることができるかという問題である。残留兵士であれ抑留者であれ、その実態は個別の具体的な生活の連なりとしてしか存在しない。しかしそれらを歴史として語ろうとすると、ある程度のまとまりをもった像として提示せざるを得ない。このとき何が拾い上げられ、何がこぼれ落ちるのか。

これは両書に通底する問題であるが、とりわけ『南方抑留』に顕著に表れる。『残留兵士』が既存の残留兵士像を解体することでその多様性を示そうとするのに対し、『南方抑留』は、そもそも共有された南方抑留像が十分に存在しない状況のもとで新たな像の構築を試みているためである。

同書が依拠する自己語りの史料は、その点で魅力と難しさをあわせ持つ。日記や手記に記された言葉はきわめて具体的であり、その場に生きた個人の感情や思考が刻み込まれている。しかしその具体性ゆえに、それらをいかにして南方抑留という枠組みに接続するのかという問題が生じる。どの語りを取り上げてどの記述に意味を見出すのかという選択を避けることができず、しかもその選択はしばしば目に見えないかたちで同書が提示する像の輪郭を規定することになる。

『南方抑留』は、この避けがたい代表性の問題に対して、「南方抑留」という枠組みの提示によって応答しようとする。国・地域ごとの抑留経験の差異を詳細に掘り下げるよりも経験の共通性を描き出すことに力点を置き、労働、飢餓、屈辱、さらには内面的な変化に注目して、これまで断片として存在していた経験に一つの輪郭を与えていく。これにより、各章で取り上げられる事例は「南方抑留」という経験を構成する要素として

位置づけられ、個別の事例の代表性の問題は前面に出にくい構成になっている。

ただし、この方法がすべての問題を解消するわけではない。とりわけ抑留経験を国・地域ごとに捉えようとする視点との間にはなお検討の余地が残されている。同書では章題においてなるべく国別区分を前提としない工夫が見受けられるが、実際の抑留のあり方は連合軍側の統治主体によって規定されていたことから、記述においては旧植民地や今日の国・地域ごとに整理されざるを得ない側面がある。こうした整理のしかたは、ジャワでは再動員、レンバン島では飢餓、ビルマでは文化活動、フィリピンでは暴力、ラバウルでは軍隊秩序の持続といったように、それぞれの地域の経験を特定の特徴と結びつけて理解する契機にもなりうるだろう。その結果、地域ごとに異なる経験の間に存在する重なりや多層的な広がり相対的に見えにくくなる可能性も否定できない。

もっとも、こうした点は同書の価値を損なうものではなく、むしろ同書が提示した枠組みが新たな問いを呼び起こしていると見るべきだろう。南方における多様な戦後経験をどのように記述し、どのように共有しうるのであるかという困難な課題を正面から引き受け、その輪郭を示したところに同書の開拓的な意義がある。

『残留兵士』と『南方抑留』は、それぞれ異なる方法で戦後経験の記述の可能性を押し広げている。両書は東南アジアにおける戦後経験の多様性を明らかにするだけでなく、それが日本との関係の中でどのように語られてきたのか、あるいは語られてこなかったのかという問題も浮かび上がらせる。そこに見えてくる記憶の非対称性は東南アジア研究に対しても新たな視座をもたらすだろう。両書はその接点を切り開く試みとして今後の研究に少なからぬ示唆を与えている。

(山本博之・京都大学東南アジア地域研究研究所)

#### 参考文献

林 英一. 2012. 『残留日本兵——アジアに生きた一万人の戦後』中公新書. 東京：中央公論新社.

パッタジット・タンシンマンコン. 『タイ外交史を読み直す——「竹の外交論」からの脱却』東京大学出版会, 2025, xi+279p.

本書は、タイ人である著者が日本語でタイ外交史の再解釈を試みた貴重な一冊である。本書の目的は、竹の外交論によるタイ外交理解をライバル仮説として、指導者らの対外認識の詳細な考察によって、タイの外交をより「主体的な」歴史として「読み直す」ことである。主として、1960年代から現在までの複雑な国際情勢と国内政治の中で、タイの指導者、メディア、知識人、一般市民がどのように対外意識を形成し対外政策に関与してきたのかという重層的な関係性に焦点を当てる。この著者の対外認識に注目するアプローチは、竹の外交論をネオリアリズム的な大国間の権力構造による外交の説明として捉えたうえで、それへの対抗としてのアクターの認識やイメージや規範に注目する構成主義的国際関係論の特徴を持つ。

以下、最初に、本書の内容の概略を紹介し、つぎに、若干の評者の考察を述べたい。まず、「まえがき」において、本書のキーワードである竹の外交論を、「歴代の聡明な指導者らが主体性を置き去りにして大国の風向きに巧みにしなった結果、タイは独立が保たれた」という論理で構成され、この概念の前提には「小国意識」があると説明する(p. ii)。

序章において、著者は、本書の目的は竹の外交論の見直しであると述べる。著者は、竹の外交論の問題点として、その定義の曖昧さ、逸脱事例の無視、各アクターの主体性の見過ごしの3つを挙げ、それらの問題の克服を目指す。本書の狙いは、竹の外交論がいう、大風が来ると機械的にその風に賢くしなう竹が語る物語ではなく、アクターの認識に注目することによって、多様な人間性が垣間見える「もうひとつ」の外交史を描くことであると説明する(p. 11)。アクターの認識に注目する理由は、政策決定者は状況の「客観的」事実に対応するのではなく、世界の「見え方」にしたがって行動するからであると指摘する。したがって、アクターの主体性を軽視する「竹の外交論の神話」から脱するためには、アクターの認識に注目する